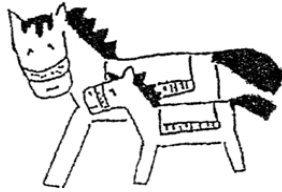


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

26年 1月 NO. 230



(厚生労働省・高松市委託事業)

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

～どなたでも～

1月の主な活動

～お気軽にどうぞ～

1月 10日	金	おはなしの会 10:00～11:30	色々な動物がでてくるお話や 十二支のおはなしもあります。
1月 16日	木	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	3月1日(土)の「今、生きる力をみすゞさんの 詩から」の行事について準備会を開きます。
1月 18日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って 一緒にあそびましょう。
1月 18日	土	笑いヨーガ 14:00～16:00	最後の笑いヨーガとなります。 笑ってこの1年を過ごしましょう。
1月 25日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も子育て体験に おいで下さい。
1月 28日	火	健康・育児相談 11:00～12:00	園医師(小児科)にゆっくり 相談できます。(予約要)

・火～金の13時～16時までは、園内開放しています
ので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談(月～土) 9:00～18:00

しつけや子育てについての悩み、保育園生活
入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター

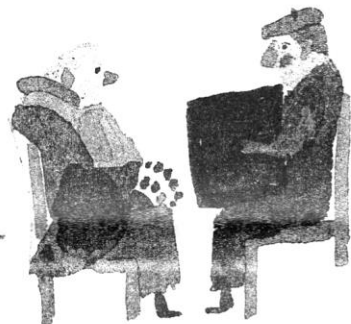


数字

二つと三つで五つです。
五つと七つで十二です。
一年生になりたては、
浜の小石を拾って行って、
それで算術習います。
何万、何千、何百を、
割ったり、掛けたり、
さんよ
そんなお算用する今は
おじ
サンタクロスの小父さんほども、
小石しよ背負わなきやなるまいに。
かるい鉛筆一本で、
書ける数字は、嬉しいな。

26年3月1日(土)に「金子みすゞ生誕110年によせて 今、生きる力をみすゞさんの詩から」をテーマに高松国分寺ホールで13時より開きます。内容は、矢崎節夫氏の講演や佐治晴夫氏との対談、詩の朗読やオカリナ演奏、佐治氏作曲 金子みすゞ詩の歌曲のコンサートもあり、盛りだくさんです。

今月は、出演してくださる佐治晴夫氏(宇宙物理学者)が毎日新聞の愛知版に連載している「佐治博士のへえ～そうなんだ!？」からをご紹介します。



「佐治博士のへえ～そうなんだ!？」

① 自分とは、いかなる存在か

みなさんは、ご自分の顔をごらんになったことがありますか？

「もちろん鏡で」という声が聞こえてきそうですが、鏡に映る顔は、上下はそのままでも、左右が反対です。鏡に顔を近づけると、鏡の中の顔は、逆にこちらに近づいてきます。つまり、鏡のこちら側とあちら側の世界は鏡に垂直な方向に対して反転しているので、鏡に映る自分の顔は、他者が見る顔とは左右反対になってしまうのです。

それでは写真に撮れば自分の顔に出会えるのでしょうか。新聞の写真をみればわかるように、写真はたくさんの粒が平面状に集まってできた図形で、立体感がありませんから、これも自分の顔だとはいえません。結局、自分の顔をじかに見るためには、顔から目だけが飛び出して振り返るしかありませんが、もし、それができたとしても、そこに見えるのは、目のない顔であり、どんなことをしても、自分で自分の顔を見ることはできないということになります。

ふだん、自分のことは自分が一番よく知っていると思っているのは、大きな誤解だということ。そうだとすれば、自分が思っている自分と相手が思っている自分との間には、いつも大きなへだたりがあるということになりますね。しかも、職場にいるときの自分と自宅にいるときの自分は、おそらく別人であって、自分がおかれている環境によって、自分は変わっているはず。です。

いったい、自分とは、いかなる存在なのでしょう。宮沢賢治が、詩集「春と修羅」の序文の中に書いているように「あらゆる幽霊の複合体」なのかもしれません。

ところで、私たちの体はおよそ60兆個の細胞からできているといわれています。そして、

その1個の細胞の中にたたみこまれている遺伝情報の鎖分子、つまりDNAを真っすぐに伸ばすと2メートルになるのだそうです。そうすると、体全体の細胞で考えれば、その長さはなんと1200億キロ、地球から太陽までの距離の800倍です。ものすごいですね。

しかも、60兆個の細胞のうちの1%、つまり6000億個の細胞が一晩のうちに新しいものに入れ替わっているというのです。人間を物質の集合体として考えれば、昨日のあなたと今日のあなたは別人なのです。にもかかわらず、自分であり続けられるというのは不思議ですね。

その理由のひとつは、自分は自分だけからできているのではないということです。水は水ではない水素と酸素からできているように、自分も、自分以外のもの、つまり他者や環境など、まわりとの関わりがあるからこそ、自分であり続けていられるということになります。相互依存です。

もともと宇宙が一粒の光から爆発するようになってできたのですから、すべての根源は同じで、たがいに関わりあっているのは当然かもしれません。だからこそ、私たち人間にとっての幸せは、相手に喜んでもらうこと、そして「あなたに出会えてよかった」といってもらふことに尽きるのでしょう。

② 人類の星への憧れ



「ふたご座流星群」は、ごらんになれましたか。明るい月光にもかかわらず、煙のような流星痕を残して流れて行く様子は圧巻でした。世界の期待を集めていた「アイソン彗星（すいせい）」が、宮沢賢治の「よだかの星」のように消えてしまっただけに、感動的な星空風景でした。一方で、この季節の街中も、イルミネーションの星でいっぱいです。いつの時代も星に憧れる人々の心は変わらないようです。

実は、現代の科学、宗教、芸術など人類が創り上げてきた文明の陰には、いつも星への見えない憧れがありました。規則正しい星の運行に超越的な神の意思を感じた昔の人々は、その神秘を解き明かすために数学を生み出しました。それは、ゼロや無限についての知見をもたらし、その結果生まれた微分積分学が、現代文明のすべての基礎になっています。私たちの文明は例外なく星に導かれて育ってきたといってもいいでしょう。

ところで、星といえばクリスマス。これは4世紀ごろにイタリアのローマあたりを中心に

地中海地方で信仰対象だった太陽神ミトラスの祭典と北欧の冬至をめぐる祝祭がからんで、いつのまにか、イエス・キリストの生誕ということに結びついたりと考えられています。日本に入ってきたのは16世紀、イエズス会のフランシスコ・ザビエルによると考えられていますが、その後、徳川幕府のキリスト教禁止令によって、しばらく途絶え、明治維新後に復活しました。

サンタクロースのモデルは、4世紀ごろの東ローマ帝国小アジアの司教で、財産のすべてを貧しい人々のために使ったと伝えられている聖ニコラウスです。白いひげを生やした老人として知られるようになったのは、19世紀ドイツの画家、トーマス・ナストの絵で、作品の中での老人は北極圏に住んでいるとされていたため、フィンランドにはサンタ村までできてしまいました。

さらに、クリスマスには欠かせないツリーの原形は、もともと魔除けの意味でモミ、ヒイラギ、ツゲといったような常緑樹を飾ったドイツの風習によるもので、こずえに輝く星は、キリスト降誕のときに輝いたとされるベツレヘムの星を意味しています。枝には長いキャンデーをつるしますが、これは私たちが羊にみたと、それを導く羊飼いを神として、その羊飼いが持っているつえの象徴だとされています。

ところで、クリスマスといえば、贈り物ということになりますが、日本でも、年末には贈り物の習慣があります。そこに登場するのが、封筒や品物につける熨斗(のし)と水引です。もともと熨斗は、アワビの皮を薄くのばして乾燥させたもので、「のばす」ことから長寿を祈願する意味をもっています。一方、水引は和紙をこより状にしてのりで固めたもので、その結び目がほどけづらく、しかも両端を引っ張れば、かえってより固く結ばれてしまうという結び方から「絆」を意味しています。

今年も残りわずかになりました。どうぞよいお年をお迎えくださいますように。



▼ 佐治晴夫 (さじ・はるお) ▼

1935年、東京生まれ。理学博士。東京大物性研究所、玉川大・宮城大教授、鈴鹿短大
学長などを経て同短大名誉学長、大阪音大客員教授。宇宙創成に関わる「ゆらぎ理論」で知
られる。JAXA宇宙連詩編纂(へんさん)委員会委員長。